

# キハダ 中西部太平洋

Yellowfin Tuna, *Thunnus albacares*



## 管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)

## 最近一年間の動き

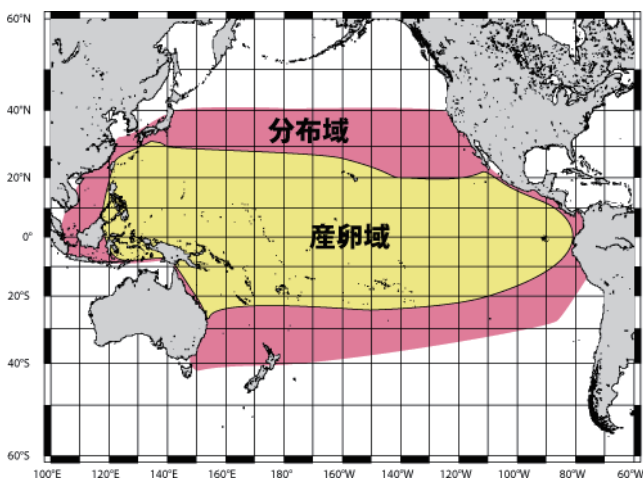
1997 年以降、中西部太平洋におけるキハダ漁獲量は、4 万トン前後で比較的安定しており、2006 年の中西部太平洋における漁獲量は平年並みの 424,781 トンであった。

## 生物学的特性

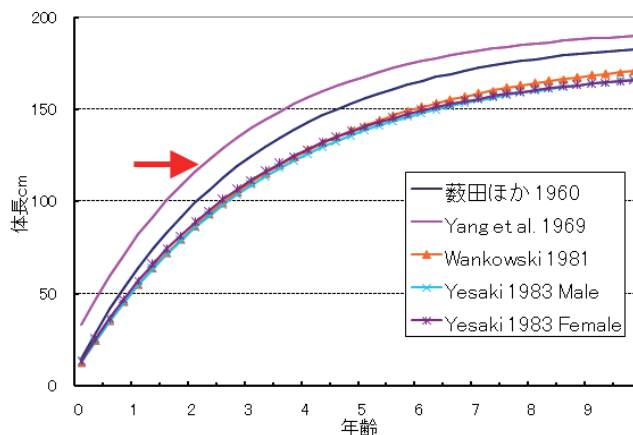
- 寿命：7～10 歳
- 成熟開始年齢：3 歳
- 産卵期・産卵場：周年・表面水温 24℃以上の海域
- 索餌場：分布域に等しい
- 食性：魚類・甲殻類・頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

## 利用・用途

刺身、缶詰、練り製品の原料



太平洋におけるキハダの分布



中西部太平洋キハダの年齢と成長

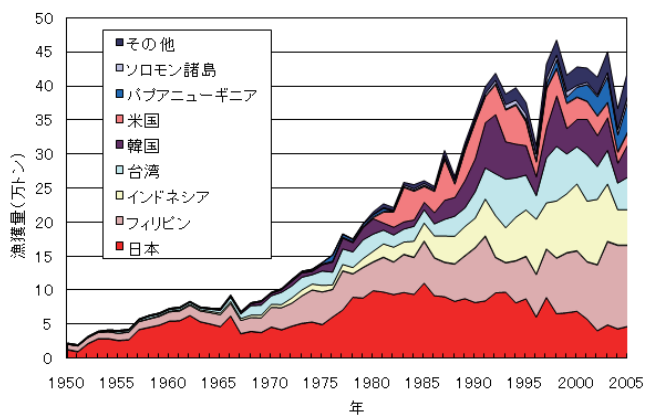
矢印はほぼ全ての個体が成熟する体長(尾叉長 120 cm)を示す

## 漁業の特徴

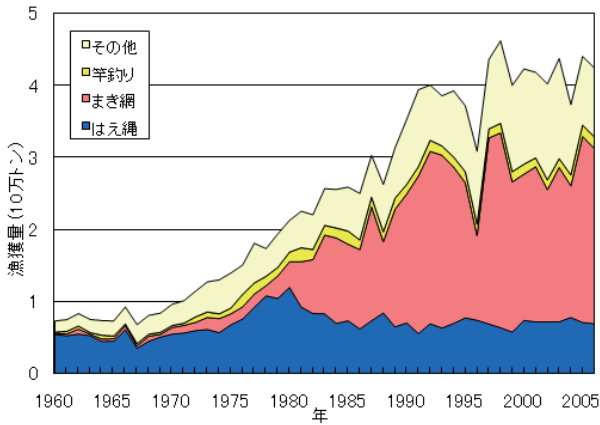
本資源の主要な漁業は大洋のやや深い水深帯 (100～250 m) の魚群が対象のはえ縄と、表層付近の魚群が対象のまき網・竿釣りである。従来は、はえ縄の漁獲が大勢を占めたが、1980 年代からまき網漁業が熱帯水域で発達し、その漁獲量は他漁業を遥かに凌駕した。フィリピン・インドネシアでは小型まき網、ひき網、竿釣り、手釣りなど漁業が小規模かつ多様で、漁獲量も大きく、増加傾向にある。

## 漁業資源の動向

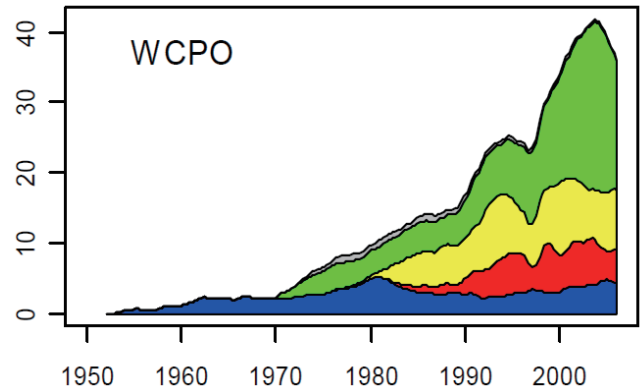
本資源のはえ縄漁業は 1950 年代初頭にキハダを主な対象種として発展し、1970 年代半ばにその主な対象をメバチに換えた。本資源の大規模な産業的まき網漁業は 1980 年代初めに、カツオを主要な対象種としつつ多くのキハダも漁獲する漁業として発達した。まき網漁業の発展は、インドネシアとフィリピンによる漁獲の増加と相まって、1980 年から 1990 年の間に中西部太平洋でのキハダの漁獲を 20 万トンから 40 万トンへと倍増させた。この 10 年、年間の漁獲の 40～60% はまき網で漁獲されている。



中西部太平洋におけるキハダの国別漁獲量年変化



中西部太平洋におけるキハダの漁法別漁獲量年変化

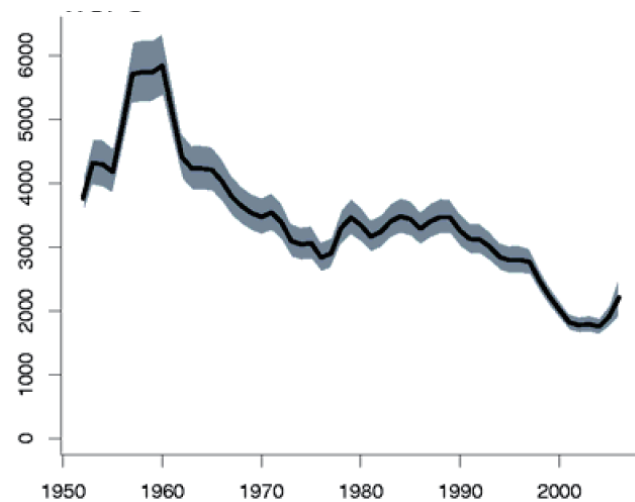
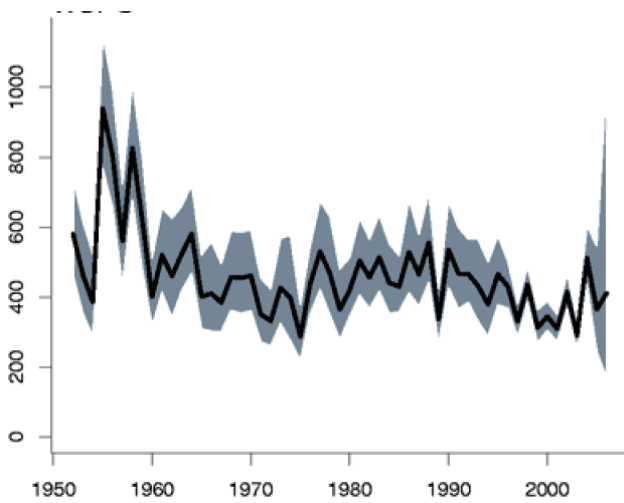


MULTIFAN-CL で推定された各漁業の本資源への影響

(Hampton et al., 2007)

縦軸は漁業が資源を減少させた割合(%)を示したものの。

はえ縄 (青)、まき網素群れ (赤)、まき網流れ物 (黄)、  
フィリピン・インドネシアの漁業 (緑)、その他 (灰色)



MULTIFAN-CL で推定した加入量(上)と総資源量の傾向 (千トン、影の部分は 95%信頼限界) (Hampton et al., 2007)

**資源状態**

2007 年の資源評価の結果、現在の資源量は MSY を達成する資源量を上回っており、WCPO におけるキハダ資源は乱獲状態にはないと推定される。漁獲死亡については、 $F_{current} / F_{MSY}$  の点推定値は 1 よりわずかに小さい (0.95) が、 $F_{current} / F_{MSY}$  が 1.0 よりも小さい確率 (53%) と大きい確率 (47%) は実質上等しい。したがって、WCPO においてキハダの過剰漁獲が生じていないと断定的に結論付けることはできない。基本的に、中西部太平洋のキハダ漁業は満限に資源を開発利用していると考えられる。

**管理方策**

WCPFC において、メバチ・キハダの保存管理措置として、まき網漁業の努力量制限、はえ縄によるメバチ漁獲量規制が合意されている。

**資源評価まとめ**

- WCPFC からの委託により、SPC (南太平洋委員会) の OFP (Oceanic Fisheries Programme) が実施
- 統合モデルである MULTIFAN-CL により評価
- 資源水準は中位で横ばい

**キハダ(中西部太平洋)の資源の現況 (要約表)**

資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	37.3~44.1 万トン 平均: 41.6 万トン
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	4.1~5.8 万トン 平均: 4.8 万トン